



■ テーマ名

逐次通訳における効率的・効果的なノートテイキングに関する調査

■ キーワード

ノートテイキング、逐次通訳

■ 研究の概要

2000年ごろから、日本の大学において本格的な通訳教育が行われるようになり、シャドーイングなどの通訳訓練が、一般的な英語の授業でも取り入れられています。このようなアプローチはTILT (Translation and Interpreting in Language Teaching) と呼ばれており、TOEFLなどのリスニングテストにおいては、ノートテイキングの重要性も認められています。

逐次通訳におけるノートは、通訳者の短期記憶容量の限界を補うための重要な手段です。しかしながら、現在の大学における通訳訓練の中では、ノートテイキングは体系的に指導されておらず、「できるだけたくさん練習して、自分なりのやり方を身につける」といったごく大雑把なアドバイスのほかには、ノートテイキングを具体的にどのように指導あるいは習得すべきかについて、コンセンサスが成立していません (染谷, 1994-2015)。

ノートテイキングの技術的な面については、Rozan (1958) においてカバーされており、これ以降の技術論は、ほぼすべて Rozan をベースにしています。また、Matyssek (1989) は、数百におよぶ通訳ノート用の記号を提案しており、日本でも部分的に取り入れられています。最近では、Gillies (2017) が、ノートテイキングの方法論として、概念を理解し分割すること、関連性を意識し、斜めにずらしながらできるだけ少なくノートを取るなどを挙げていますが、西洋言語間と違って、英語・日本語間では語順と文法構造が異なることなどに、別途配慮が必要です。

大脳生理学的に見れば、「記憶」はシナプスの連合による神経ネットワークとして構成されますが、われわれがこれを意識化して表現し人に伝えるためには、何らかの言語的な形式に落とし込まなければなりません。

<利用分野・用途・効果>

- ・ノートテイキングにおける学習・指導法の開発

S=P+M

where

S = Sentence (文)

P = Proposition (命題) → 情報の中身

M = Modality (モダリティ) → 伝達の様式 (どう伝えるかに関わる要素)

P = Pred. (Arg.1, ... Arg.n)

where

Arg. = Argument (項) → 主語や目的語になるもの

Pred. = Predicate (述語) → 項の状態や関係、動作・行動などについて述べたもの

Fillmore (1968) の言語モデルによると、われわれの記憶に残るのは、テキストの意味内容を構成する命題ならびにモダリティです。ノートに残されるのは、命題の核となる項と述語 (何がどうした) であり、文法的・形式的要素の多くはほぼ自動的に復元可能です (染谷, 1994-2015)。

■ 関連業績 (特許・文献)

<論文>

- ・ことばの科学研究第 18 号、101-108 (2017)
- ・言語学習と教育言語学：2017 年度版、97-102 (2018)

<発表>

- ・Psychology of Language Learning Conference, Waseda University (2018)

医療・福祉・介護・リハビリテーション

環境・健康・食品

バイオ／ライフサイエンス

人文・心理・教育・グローバル

経済・経営・社会・法学

索引